



ミルトス

117 編は詩編のなかで最も短く、わずか 2 節から成り立っています。詠み人知らずです。

すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。(1) 主の慈しみとまことはどこしえに／わたしたちを超えて力強い。ハレルヤ。(2)

こんなに短い詩編が単独で存在するとは驚きです。と同時に、冒頭の **すべての国よ、主を賛美せよ。(1)** との言葉にはさらに驚かされます。神に選ばれた民であることを誇り、偶像である神々を頼る他国を見下すイスラエルが **すべての国** を視野に入れ、他国の民族も含め、**すべての民よ、主をほめたたえよ。(1)**

と、主を賛美するように勧め、招いているからです。このような世界主義を持つ詩編はこの 117 編だけです。重厚長大な作品ではなく、短く、簡潔です。忍耐力がない現代人の私には、暗記しやすく、ピッタリです。

すべての国 すべての民 とあります。詩人は国と民をどのように理解していたのでしょうか。旧約聖書は口伝による伝承から始まり紀元前 400 年頃に文書としてまとめられましたから、その時代の世界観を示しているでしょう。その世界は、中東から始まり、地中海沿岸、西はイベリア半島あたりまでの狭いものです。**創世記 10 章** に記されているように、民族はノアの三人の息子セム、ハム、ヤフェトの子孫から派生し、セムの子孫はアジア、ハムの子孫はアフリカ、ヤフェトの子孫はヨーロッパに、氏族、言語、地域、民族ごとに広がっていったと記されています。遺伝子的に考えれば、聖書はノアの DNA を全ての人を持っているということになります。遺伝子は流動して広がり、分れていくでしょう。また、それぞれの地域の地理的環境が体にも影響を及ぼすでしょう。それぞれの場所で各自が共通の伝承、言語、宗教、習慣を持ち、歴史を刻み、民族としての意識が芽生えるのでしょう。

現在、聖書は 2500 言語に翻訳されているそうですが、少数民族は 3000 以上もあるといえます。国家としては、193 ヶ国が国連に加盟しています。バチカンはオブザーバーですが、パレスチナと中華民国(台湾)が加盟を承認されていません。国連に参加しない国もいくつかあるとのこと。

民族、国家の違いを超えて、詩人は **すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。** と呼びかけているのです。その根拠として **主の慈しみとまことはどこしえに／わたしたちを超えて力強い。** と、神の愛と真実は永遠に変わらない。人は弱く、神の愛と真実によって生きるという確信を伝えています。男女の区別なく、老いも若きも、力あるものもないものも、病む者も健やかな者も、主により一つの民とされ、すべての者が等しく祝福されている、**ハレルヤ**と感謝し、賛美しています。

『讚美歌 21』は詩編歌として 151「主をほめたたえよ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-05> を挙げています。16 世紀のドイツ語韻律詩篇の作詞家サルトリウス、曲はルター派の作曲家ヴルピウスによる讚美歌です。世界中で愛唱される讚美歌となっています。

ジュネーブ詩編歌はオルガンとリコーダーによる合奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=p4e3PQmNX6k&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=117>